

日本文化を教える ― カンタベリー大学 アジア研究学部 (NZ)

佐藤 幸子

(1)

「来年もいくんですか？」学長の言葉に私はあっけにとられてしまった。まだ行ってもいないのに来年のことなど分かる筈はない。昨秋、2003年前期はカンタベリー大学で日本文化を教えることになり、小樽短大は後期に講義をもつことになった時のことである。はたして外国での英語の講義がどんなものになるか、まったく見当もつかなく、ただ資料だけはどっさり船で送った。14年前に留学した時は1年間の滞在だったので30個以上の荷物を送ったが、今回は半年の滞在なので23個位だったと思う。

ここまでくるには長い年月だったようにも思うが、でもほんの一瞬のこのような気もする。14年前、何がなんだか分からない内に、気がついたらニュージーランドの土を踏んでいた。そして日本にいた時には想像もつかないような幸せな留学生活だった。皆様に大切にさせていただいて、夢のように恵まれた日々であった。こうして私とニュージーランドとの切るに切れぬ縁がはじまった。そして今回も沢山の人々に支えられて思いもよらないほど、大きな成果をあげることができた。茶道、音楽、舞踊、絵画などさまざまな日本文化について調べれば調べるほど、その奥深さに魅せられる日々であった。毎日毎日、私は宿舎(ユニバーシティ ホール)の自室で日本文化の勉強に明け暮れた。夜の夜中に外国で日本文化に感動している自分の姿がとても不思議に思われた。

これまで自分の講義についてはそれなりに工夫をこらしてきたつもりである。決して手を抜いて来たつもりはない。しかし、ニュージーランドから帰ってきてから、なぜかこれでいいのだろうか、これでいいのだろうかという思いに囚われている。後期が始まる時、すでに準備は終わっているのに、私は何度も何度もテキストをひっくり返していた。これでいいのだろうか、もっと工夫をこらす部分はないのだろうかと何度も自分に問うていた。

それほどカンタベリー大学での講義の準備には時間をかけた。時々いろいろなところに出す原稿を書く以外は、講義のノートを作ることに専念していた。

(2)

一番楽しかったのは、日本画の歴史の準備だった。子供の時絵を描くのが好きで、担任の先生が私を美術学校にやるよう親に勧めたこともあったらしい。しかし、その後、腕前はさっぱり上がらず、大人になってからはもっぱら鑑賞に徹して、特に上村松園にいれこんでいて、東京で彼女の展覧会があった時には日帰りで見に行った。このたびのことに備えて、昨年ある美術館の日本画の講義を受けた。むろんこれまで長い年月にわたって、いろいろな形で美術講座は受けてきていた。縄文時代の可愛らしい埴輪など魅力的な日本の美術は限りなくあるが、すべてを取り上げるわけにはいかない。そこで江戸末期から明治時代の日本画のスライドを入手して、私の好きな松園を中心にして美しい日本画について講義することにした。講義ノートを作り始めた時は、

ああ！ これぞ大学の授業だ、私はひとり感動していた。英文学史などは別として、教養英語に明け暮れることの多い語学教師としては、その深さという部分ではいまいち物足りないものがあった。しかし、この講義の準備をしている時、私は充実感に満たされ楽しい仕事であった。まさに新鮮な空気を吸いこむ思いで原稿を作っていた。しかし、当然のことながら、それは大変な仕事で次第に苦しくなっていた。たとえば、「滝となり急流となって岩をかみながら押し下がる水勢を描いた8曲屏風……」とか、「写実に基づいた抽象画ともいうべきで、日本的な装飾的手法を清新な自然観のなかに生かしたもの」など、この通りではなくても、こういう類の文章やこういう内容をどの様に英語に翻訳したら良いのだろうか。しかし私にはいつも救いの神様が現れるのだ。私の部屋の向かいにいい年をして独身のアイルランドの男性（Dermot Joyce）がいた。長い間ロンドンの会社で働いていたが、一年ほどニュージーランドで骨休みをしている人で、彼が私のメッセンジャーボーイとしていろいろな面で私を助けてくれた。日本から到着した荷物を研究室から運んだり、お茶道具の移動など、そして一番有り難かったことは私の英語を丁寧に推敲してくれたことだ。もし彼がいなかったならどうなったかと思うとぞっとする。私はいつも走ってしまってから考えるのだ。

寮生活を経験したことのない私だったが、寮生活というものがいかに便利なものか身にしみて分かった。私の原稿とスライドを彼に渡すと、彼は問題のある箇所にナンバーをつけて、それをより良い表現に直してまとめて別紙に書いてくれた。その後彼と二人で頭をつきあわせて、それで良いか検討をするのだった。それは長くて根気のいる仕事だった。しかし美術の好きな私にとって辛いけれど、楽しい仕事でもあった。取り上げた画家は円山応挙、谷文晁、平賀源内、懐月堂安度、宮川長春、鈴木春信、鳥居清長、喜多川歌麿、東州斎写楽、歌川豊国、葛飾北斎、歌川広重、狩野芳崖、菱田春草、横山大観、富岡鉄斎、川合玉堂、上村松園、土田麦遷、速水御舟などであった。

カンタベリー大学の図書館には立派な日本美術の画集があって、ダーマットは興味を持って見てくれた。ところが同様に外国で出版された浮世絵の画集はこんな画集があるのかと目をまわした。その一部は春画とでも言った方が良いかも知れない。しかし、本当に美しい浮世絵も沢山あったので、ダーマットにお見せしたかった、が、結局それは出来なかった。

ダーマットが帰国する日が近付いてもまだ仕事は終わらなかった。彼はユニバーシティホールを出てゲストハウスという民間のモテルに移った。そこでお互いの都合の良い日に私は彼のもとを訪れ、仕事を続けた。彼は間もなく南島の旅行に出かけた。このホールで暮らした人々は帰国する前にたいいニュージーランドを旅行するようだ。

日本では4LDKで一人のびのびと暮らしていたが、ここでは当然1室の生活で、しかも、バスタブがないなど生まれて初めての寮生活でストレスが溜まるのを恐れて、私は“Rydges”という日本人がよく泊まるホテルに1、2カ月に1回泊まった(ここには日本人の腕の良いコックがいて、美味しい料理を出してくれた。彼はなかなかの好青年でカンタベリー大学での私の講義に出席したがっていた)。10日ほどしてダーマットが戻ってきた時、私はこのホテルに泊まっていたので、そこへ彼は来てくれて我々はまた仕事を続けた。ホテルの一室で妙齡(?)の男女が頭を突き合わせて、ああでもない、こうでもない議論をしている姿は、はたから見ればさぞおかしなものだったろう。しかし彼の帰国の日が迫っていて、我々はただ必死だった。やっとすべてが終わった時、私はお礼に日本舞踊(「さくら」と「えび」)を踊った。私は歌麿のような美人画の色紙を持っていて、お世話になる度に差し上げていた。どれもこれもそれなりに美しく差し上げるのが

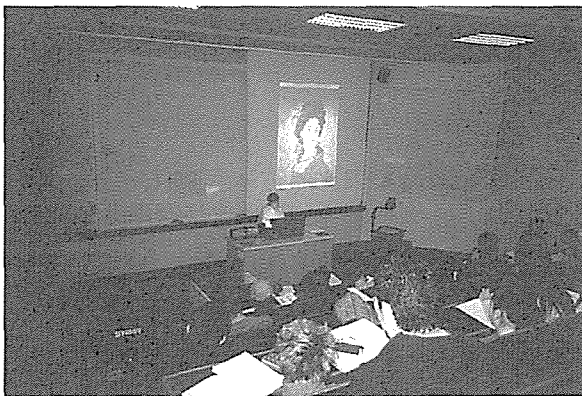
惜しい気さへした。さてどれをあげようと思った時、むろん自分が好きなものは最後まで残したい。派手好みの私としては地味なものから無くなっていったら欲しい。しかしこんなにお世話になった人にそんな姑息なことはしたくなかった。かれが一番気に入ったものをご自分で選んでいただこうと思って、私は4、5枚の絵を机の上の壁に立て掛けた。彼は意外にも一番地味な美人を選んだ。数日後、私は空港に彼を見送って、我々は十分別れを惜しむことが出来た。彼は貨物船で長い時間をかけてアイルランドに帰るのだ。あまりにも自由な生活を享受しすぎて昼夜逆の生活になってしまった彼は、これから社会に出てまともな市民生活をするためには、まずそこから改めていかなければならないのだ。仕事が決まって住所が定まり、生活が落ち着いたら手紙をくれることになっているが、まだ手紙は来ない。

(3)

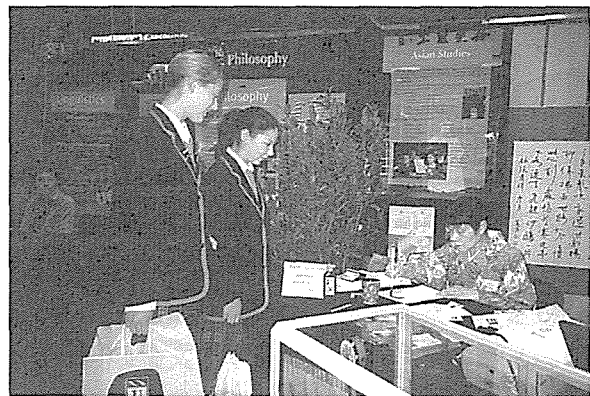
最後の授業評価のアンケートでは、本当の日本を知ることができたと大変好評であった由、ヘッドのパーマー博士は喜んでくれた。私はアンケートのことなどまったく忘れていた。ただ全力投球するのみだった。考えたことはそれだけだった。最後に博士が私の研究室にいらして、立派なニュージーランドの植物の本をプレゼントして下さって、おっしゃった言葉を私はぜったい忘れないだろう。いくら忘れっぽい私でも忘れるわけにはいかない。「頭がさがります」。彼女は日本語(!)でそう言われたのだ。もしこの言葉を日本人から聞いたのなら、それほど感激しなかったらと思う。まさかこんな言葉を言っていただけるとは夢にも思っていなかった。でも、書道の時間が終わった時、彼女はしみじみと「学生たちはしあわせです」と言われた。

今、思い出しても書道の授業が一番うまくいったと思う。皮肉にも一番心配した授業が一番うまくいったのだ。日本の書道人口の凄さにはあきれられるばかりだ。なぜこんなに日本人は書道が好きなのだろうか。私にはさっぱり分らない。絵の好きな私はいつこの間まで「白と黒だけの書道のどこが面白い!」と皮肉っていた。ところがなぜか北海道一の先生につく羽目になってしまったのだ。好きでもないことだったけれど、このことが私に沢山の幸せをもたらしてくれることになった。

「人間は死んでいなくなるけれど書は残ります」と言う私の言葉にパーマー先生は深くうなずいた。聖徳太子、聖武天皇、光明皇后など信じられないほど遠い昔の人々の作品を書物に見て、い



日本画の講義。日本にはじめて油絵を紹介した平賀源内



クライストチャーチの進学オリエンテーション。高校生に彼女達の名前を筆で書いているところ

つの間にか私は興奮していた。最初は不器用なニュージーランドの若者に書道を体験させるというのは一体どんなことになるのか、考えただけで気が遠くなりそうだった。墨をあちこちに飛ばしたり、硯から墨をこぼしたり、服を汚したり、予想のつかないことが起こるのではという心配ばかりしていた。だから準備だけは念には念をいれなくてはと思った。授業の内容は彼等に自分の名前を書いてもらうことにした。例えば、「John Smith」という名前の人には「ジョン スミス」というように筆で書いてもらうのだ。かってニュージーランドの学校を訪問した時に、この方法は大変喜ばれることだと知った。私は全員にお手本を書いてあげることにした。私が担当していた JAPA 108 のクラスには五十人位の学生が登録していたので、全員の名前をカタカナで半紙に書いて、そばにエンピツで筆順を書いた。滞在していた宿舍の食堂でせっせと書き上げた。私は同じフロアの研究者たちの名前も書いてあげて、大いに喜んでいただいた。

この準備も日本画と同様アイルランド人のお世話になった。「さあ！ 始めて下さい」とまもなく講師になるというイボンヌ (Yvonne Buckley) は私の前の椅子にどっかりと腰をおろした。私は愕然となった。彼女にいくつかの質問をするつもりではいたが、こ、これは困ったことになった。しかし、今さら後には引けない。私は覚悟をきめた。天井を見つめながら、英語で書道の講義をはじめた。日本語を知らない学生もいるので、まず、講義に先立って、漢字を中国から取り入れて、仮名を作り上げた歴史を語った。実際に実技に入った時、どのように学生に書道の手順を説明するかを述べた。彼女は時々それよりこの表現の方が良いというようなアドバイスをしてくれた。

書道に使う教室は普段使う教室と違うことが私の頭を悩ませた。しかも、直前まで使用しているのだ。まず机を並べ変えることから準備が始まり、なすべき事が山とあった。それを短時間でしなければならない。日本人学生達が大いに手伝ってくれた。机の上にフェルトの下敷きと半紙をおいて、下敷きの下にさらに半紙5枚をいれた。書いた作品は椅子の下に置くように指示した。一番迷ったのが新しい筆の扱いだった。日本人学生のアドバイスであらかじめすべての学生の筆を私がおろしておかなかつたら、大変なことになっていたろう。教室では学生の興味をひくように、「ジョージ ブッシュ」「サダム フセイン」などと書いた半紙や聖書の言葉を書いた色紙、日本の子供達（3歳から）の入選作品などを黒板に張って、いかに日本人が書愛しているかを説明した。学生達は実に行儀良く熱心に取り組んでくれた。ただ右からではなくて左から書く学生がいてびっくりした。図書館に勤めている日本女性の言うには「それだけ日本の文化に馴れてきたということでしょうね」。つまり、ほとんどの高校には日本語コースがあり、日本に修学旅行に来たり、日本の家庭にステイしたりするのだ。

(4)

茶道はこれまでオーストラリアやニュージーランドでたびたびデモンストレーションをしてきたので、要領は良く分かっていて、なんととっても面白いのはその歴史だ。しかしそれについては数年前ペルーで日本語を教えた時のことを本誌に書いたので省略する。この度はさらに内容を深めるべく茶道そのものつまりお点前に関する本や茶道の歴史と関わりのある本（特に千利久を中心として）を読んだ。日本の文化の奥行きや深さや慎み深さに私はまるで溺れるように引き込まれた。くる日もくる日も感動で胸が震えた。こんなに幸せでいいのだろうかと思つた。その中で白眉は千利久の侘茶の思想を解明する唯一の茶書と言われる立花実山の「南方録」と平易ながら私の所属する裏千家お家元、千宗室の「一椀のお茶から」であった。秀吉と利久の関係、

利久の切腹などは学生の興味をひいた。また、懐紙、袱紗、茶碗、棗などのお道具の説明をしていくと結局は宮中の歌会までいかざるをえないのだ。外国で10年以上もそんなことを繰り返している内に、口先だけでそういうことを言っているのがきまり悪く思われてきて、歌人の良い友人がいることもあって、とうとう歌会に応募する羽目になってしまった。特に今年のお題は自分の名前と関わりの深い「幸」である。応募しないわけにはいかない（ついでながら、もし2万首の内の10首に入ったら都通りを逆立ちして歩くと言っている）。外国の学生はこの宮中の歌会の話を知ると、雅やかなものを感じるらしく感動するのだ。また干支の説明も当然必要になってくる。しかも今年はニュージーランドと関わりの深い羊年である。これも私にとって幸運なことであった。さらにパーマー先生は羊年生まれであった。まったく私の悪運(?)の強いのに呆れ返っている。最後にパーマー先生に珍しく布で作られた羊の置物をプレゼントした。その時、私は「先生は何回羊年を迎えられたか分かりませんが」としゃれて言ったつもりだったが、な、なんと、彼女は学生たちの方を向いて大きな声で「4回目です」と答えられて、私はギャフンとなった。こんな時日本人なら多分「さあ、忘れました」とユーモラスに答えるのではないだろうか。それにたいして、学生達の方は大笑いで終わるだろう。他の場面においても今回特に感じたことだが、ユーモアは国が違うと難しいということだ。日本人同志のようにツーカーと理解してもらえとは限らない。

(5)

キモノにたいする憧れは我々の想像以上のものがある。14年前初めてニュージーランドに滞在した時はそのことに気付かずだった。ある時、風邪をひきそうになって、オーバーがなく、着物のコートがあったので慌ててキモノを着た。その時初めて周囲の反応に驚いた。どんなに外国人がキモノを美しいと思っているか、いろいろな場面で知らされた。例えば、ホテルでコーヒーを飲むとケーキをサービスしてくれる。飛行機に乗ると二等のキップで一等の席にさせてくれる。あまりにも大切にしてくれるので、とうとうキモノを脱げなくなってしまった。

まずキモノについての説明から始めた。紐、単衣、袷、そして、付け下げと訪問着の違い（日本人でも知らない人は多い）、帯の種類など実物を見せながら説明した後、学生をモデルに着付けをした。外国人に着物を着せるということは大変なことである。言いにくいことだが、胸が出ているのだ。しかし今回はすらりとした可愛い韓国女性だったので、その点は問題なかったが、予想のつかないことが起こった。彼女の髪があまりにもサラサラしていて前に落ちてくるのだ。本当にやり難かった。やっと無事着せ終えた時は目がくらくらした。でもピンクの下着（おこし）を学生の前に大きく広げた時は、ピーッと口笛がなる騒ぎであった。キモノを着る時、肋骨に紐がかかると死ぬ目にあいますと言うと学生達はどっと笑った。あまりにも良質の帯は着ていると鳴くといわれる。谷崎潤一郎の「細雪」にでてくるが、音楽会にキモノを着ていったところ、帯がキュッキュッと鳴って当惑したという話は面白かったらしい。はたしてちゃんと着せられるかと心配したが、とても綺麗に着せることが出来、パーマー先生共々ほっとした。

(6)

日本の文化は四季をのぞいては語られない。春、夏、秋、冬と様々の四季が日本の文化を美しく彩っている。私はふと日本の美しい歌で日本の四季を説明したらどうだろうということを思いついた。ひょんなことから北上夜曲全国大会（2001年）に出る羽目になってちょっとした賞を頂

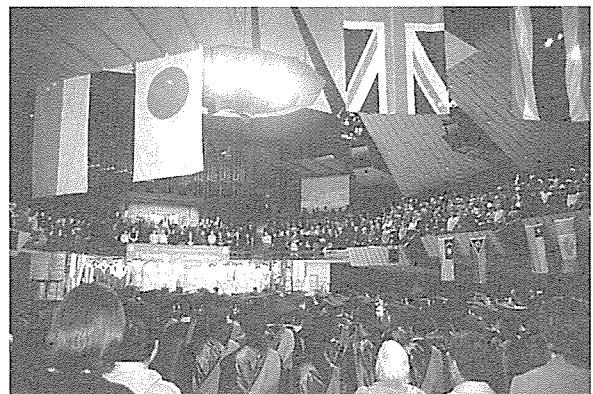
いたが、その時指導してくれた先生が12曲の歌を選んでそのテープを用意してくれた。日本の四季をあらわす歌がいかに美しいか、今こそ私は気が付いた。英語に訳さなければこの美しさをニュージーランドの学生達に分かってもらうことはできない。そこで私はすべての歌の英訳に取り組んだ。訳しながら、歌いながら、私は日本の歌の中味の深さ、面白さにいよいよのめり込んだ。ひとつひとつの言葉の美しさをかみしめている内に、今さらのようにしみじみと日本の文化というものについて考えていた。英訳はこれもいろいろな人のお世話になった。必ず英語を母国語とする人に見てもらった。しかし、当然のことながら、ここでも文化の違いによって簡単に訳すことが出来ないものがあるということを知った。例えば、「炬燵」というものはニュージーランドにはない。「雪」もほとんどない。「猫」にたいする考え方も違う。このことは学生にも話したが、みんなは大いに喜んだ。英語をチェックしてくれる人と笑ってしまうことがよくあった。私が歌っている間、歌詞はOHPで学生に見せた。

ニュージーランドの気候は乾燥しているので、喉にはあまり良くない。私はいつも湿度計をみては部屋の湿度に気をつけていた。部屋のあちこちに水を置いた。それでもあまり喉の調子が良くなく、病院に行って飲み薬やうがい薬をもらい最善の努力はした。12カ月の歌についてそれぞれ2番や3番、時には4番までもがあるのだからかなりの量になる。相当辛い仕事だった。

北上夜曲全国大会に出場したことが、また私を新しい世界に導いてくれた。ある雑誌に「北上夜曲狂騒曲」という随筆を書いたことがきっかけで、今、小樽名曲全国大会を立ち上げる話が出て、先日第一回の打ち合わせがあった。北上夜曲全国大会や江差追分全国大会のような町をあげての大会に育てあげたいと思っている。そうすれば小樽に観光客がもっと訪れて、ホテルに宿泊したり買物をしたり、小樽の繁栄と繋がっていくだろう。しかし私は本業のニュージーランド研究に全力を上げなければならないところにもきている。そんなことにうつつをぬかしてはいられないのだ。でも北上夜曲大会に出場した時と同様に、ちょっとしたホラを吹いてしまったことからのっぴきならないことになってしまった。しかし、それも運命とあきらめて自分の職分を全うするだけだと考えている。宮中歌会は都通りで逆立ちをするようなことにならないよう祈っている今日この頃である。



クライストチャーチにおけるイラク戦争反対デモ



カンタベリー大学(クライストチャーチ)の卒業式